

ぼく、ラツキー

昭和的雑種犬ワンコの物語

プロローグ

ぼくの名前はラッキー。犬です。さつきから、だれかがぼくの名前を呼んでいます。

「ラッキー、ラッキー」

聞き覚えのある声。ぼそぼそと低い声でささやいています。

「ラッキー、ラッキー」

今度は違う声がありました。ゆっくりとした、ちよつと鼻にかかった声。ああ、この懐かしさはなんだろう。この温かいこみ上げてくるものはなんだろう。しかし息をすめるのがやけに苦しい。目が開かない。開けようとするのにまぶたが重いとびらのようです。やつとの思いで見える方の左目をうつすらとあけました。でも、白内障でぼん

やりとしか見えません。

今、ぼくの目に写ったのは、たしかに大志君と母ちゃんの顔です。大志君はぼくの手を握っていました。手の先には、注射針がささって点滴がぶらさがっています。母ちゃんは、泣いていました。

二人が並んでぼくの顔を見ていました。この光景と同じことが、いつかあったような気がします。そうだ、初めて母ちゃんと大志君に会ったとき、四つの瞳とにらめっこした、あのときと同じなのです。

それは十五年前。桜の花びらが風に舞っていた日のことでした。

昼から降り出した細かい冷たい雨が、夕方になりやっとやみました。ぼくはひとりぼっちで、公園のベンチの下で寝ていました。

ぼくの仲間はどこにいったんだろう。今日の朝まで一緒だったはずなのに。暖かな
身体を寄せ合って眠っていたはずなのに。気がつくただれもいませんでした。

「どうしてなの？ みんなはどこへいったの？」

日が暮れて、まんまるお月さまが夜空に顔を出しました。そしてぼくを、明るく照
らしてくれました。でも、だれも帰ってきませんでした。

「寂しいよう。おなががすいたよう」

次の日も、ぼくはみんなの帰りを待っていました。悲しくて、「クオーン、クオーン」
と鳴いていると、

「うるさい、あっちへ行け！」

いきなり男の人がぼくをけったのです。ぼくはびっくりして、草むらに走って逃げ
ました。そして身体を小さく丸めて、じっと隠れていました。けられた右足がズキズ

キ痛^{いた}みます。ナズナの白^{しろ}い花^{はな}が鼻^{はな}先^{さき}をくすぐるので、思^{おも}わず「クシユン」とくしゃみ
が^が出^でました。

くしゃみをしている挿^さ絵^えがきます

目次

幸子さんの家さちこ いえ

大志君との出会いたいしくん であい

四つの瞳よっつ ひとみ

名前はラツキーなまえ

ぼくは番犬だぞぼんけん

こわがり研吾君けんごくん

ばあちゃんとキセル

ツルハナナス

その人は一郎さんひと いちろう

ぼくはおりこう？

かみなり

サッカーは楽しい

走るの大好き

ジェットコースター

時は流れて

一郎さんとの散歩

大志君の後悔

ばあちゃんの故郷

そして六年

ありがとう

エピローグ